連載

いのちのひろば

（55）

毎月１回、中旬の水曜日に掲載

今年のインフルエンザ流行予測とインフルエンザワクチン

小田原医師会 会員　富田 さつき

今月のひとこと

今年の冬は、新型コロナとインフルエンザの同時流行が予想されます。インフルエンザワクチンを早めに接種して、この冬に備えましょう。

新型コロナウイルス感染症の流行以降、めっきり減ったインフルエンザですが、南半球のオーストラリアでは2年間流行が抑えられていたインフルエンザが大流行し（図2）、国内でも沖縄県では早くも流行の兆しがみられています。今年の冬は、新型コロナとインフルエンザの同時流行が予想されます。「今年もどうせ流行らないだろう」とたかをくくらずに、しっかりと備えておきましょう。

新型コロナウイルス感染症は、2022年9月29日の時点で全世界で6億2千万人以上の感染者と650万人以上の死亡が報告されています。また日本における感染者は2022年9月28日時点でそれぞれ約2118万人と約4万5千人となっており第7波が徐々に収束に向かっている状況です。

一方インフルエンザについては、国内で新型コロナウイルス感染症の流行が始まった2020年2月以降、患者報告は著明に減少し、2020−2021年シーズンおよび2021−2022年シーズンの現在まで、インフルエンザの報告はほとんどみられておらず、危惧された新型コロナウイルス感染症とインフルエンザの同時流行もありませんでした（図1）。これは新型コロナウイルス感染症対策として普及した手指衛生やマスク着用、3密回避、国際的な人の移動の制限などの感染対策がインフルエンザの感染予防についても効果的だったためと考えられます。

さて、北半球の冬季のインフルエンザ流行の予測をするうえで南半球の状況は参考になると言われています。オーストラリア政府は定期的にインフルエンザの発症状況を報告していますが、2020年と2021年のインフルエンザ患者は極めて少数でした。しかし、2022年は4月後半から報告数が増加し例年以上のレベルの患者数となっており医療のひっ迫が問題となっています（図2）。今後、海外からの入国が緩和され人的交流が増加すれば国内にウイルスも持ち込まれると考えられ、わが国においても今秋から冬には同様の流行が起こる可能性があります。

一方、過去2年間、日本国内での流行がなかったために、社会全体のインフルエンザに対する集団免疫が低下していると考えられます。そのため、いったん感染がおこると、特に小児を中心に社会全体として大きな流行になるおそれがあります。

また欧米や中国では、インフルエンザウイルスのタイプのうち、主としてA香港型と呼ばれるインフルエンザウイルスによる流行がみられています。オーストラリアで本年度に検出されたインフルエンザの型が判明したもののうち、約80％がA香港型であったため、今シーズンは日本でもA香港型の流行が主体となる可能性があります。A香港型が流行する年は、インフルエンザによる死亡や入院が増加することが知られているので特に警戒が必要です。

そのインフルエンザ予防に重要なのが、インフルエンザワクチンです。インフルエンザワクチンには、4種類（A型2種類、B型2種類）のウイルス型が含まれておりA香港型もその中の1つに含まれています。国内における研究報告でも、65歳以上の高齢者施設に入所している高齢者については34％〜55％の発病を阻止し、82％の死亡を阻止する効果があったとされています。また6歳未満の小児を対象とした2013/14〜2017/18の研究では発病防止に対するインフルエンザワクチンの有効率は41〜63％と報告されてる通り、インフルエンザワクチンを接種すれば絶対にかからないというものではありません。しかし、インフルエンザの発病を予防することや、発病後の重症化や死亡を予防することに関しては、一定の効果があるとされています。

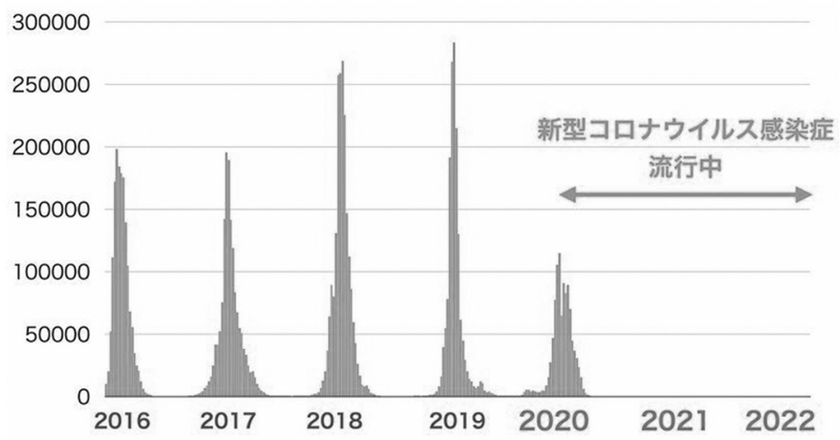
また今年は、新型コロナウイルス感染症のワクチン（2価ワクチンなど）の接種もあります。新型コロナワクチンとインフルエンザワクチンの接種間隔は、特に制限はありません。同時接種も可能ですし、翌日接種も可能（日数制限はない）です（図3）。インフルエンザワクチンと新型コロナワクチンの流通経路が違い、接種券の兼ね合いもあってタイミングよく接種できる人ばかりではないかもしれませんが、接種できるタイミングをかかりつけ医の先生とよく相談して両方接種しておくことが大切です。

インフルエンザワクチンの接種は、今年も全国の医療機関で10月1日より開始されました。今シーズンのインフルエンザの流行に備えてインフルエンザワクチンの接種をご検討ください。特に重症化リスクの高い高齢者、妊婦さん、ステロイドなどの薬を飲んで免疫が弱っている方などはインフルエンザワクチンを接種することが強く推奨されます（表1）。

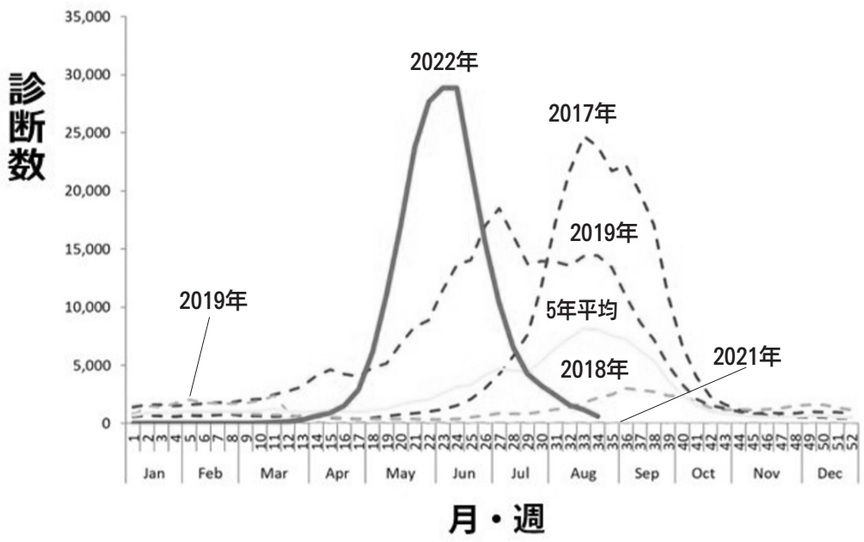
このように、オーストラリアのインフルエンザ動向を見ていると、今年はインフルエンザと新型コロナウイルス感染症の同時流行に注意が必要と考えられます。また沖縄県のインフルエンザ動向から、例年より早い時期からインフルエンザの流行が始まるのではという予測も出ています。今年も10月1日よりインフルエンザワクチン接種が始まりましたが、早めに接種してこの冬の流行に備えることをお勧めしたいと思います。またインフルエンザに対しては、他の呼吸器感染症と同様に一般的な予防も大切です。今まで通り、手洗い・マスク・咳エチケットを普段から心がけ従来通りのインフルエンザ対策を行っていただきたいと思います。

とみた・さつき　小田原生まれ。県立平塚江南高校卒、東京女子医大卒業後、東京女子医科大学付属病院 第1内科入局。山近病院（現 山近記念総合病院）を経て平成6年より父の継承で富田医院に勤務。平成15年より富田医院 院長。肺癌検診読影や結核審査に関わりながら、CHL（コミュニティヘルスリーダーシップ）学科東京で立教大学坂本文武、ふるさととという最前線でスタジオ・エル 山崎亮に学び、「地域に出て行く医療者」として「みんくるカフェ梅のさと」や「下曽我おせっかい」を多職種の仲間と運営しながら活動中。医学博士。日本プライマリケア連合学会 認定医・指導医。

次回は11月中旬「介護と医療について」を掲載する予定です。



（図１）定点当たりのインフルエンザ報告数（厚生労働省発表資料より忽那賢志医師作成）

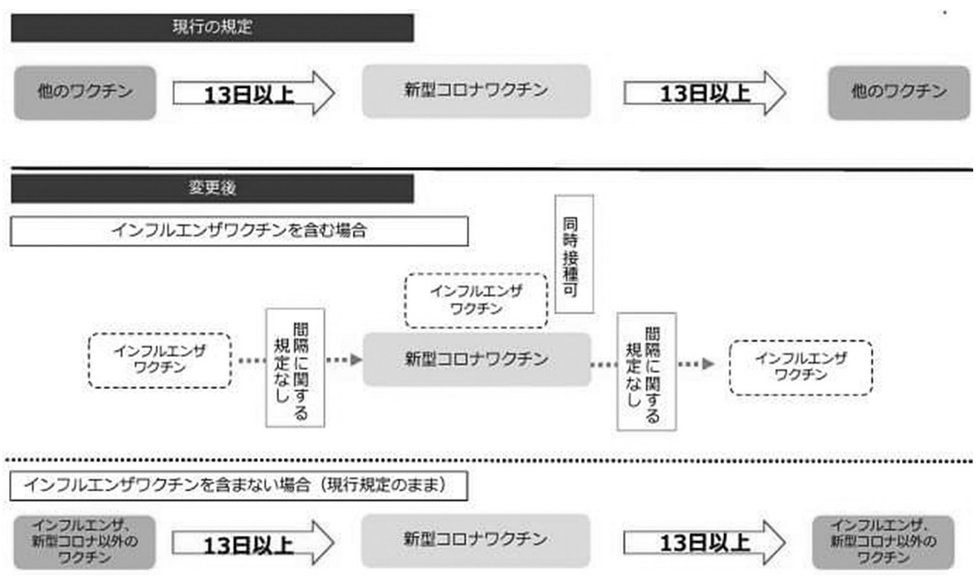


（図２）オーストラリアのインフルエンザ動向

インフルエンザに罹ると重症化しやすいためワクチン接種が強く推奨される方

- 2歳未満の小児
- 65歳以上の高齢者
- 呼吸器・心血管・腎・肝・血液・代謝内分泌（糖尿病含む）・神経筋疾患などの慢性疾患を持つもの
- 免疫不全者（免疫抑制剤使用、HIV等を含む）
- 妊娠中・出産2週間以内の女性
- 19歳未満でアスピリン長期使用者
- 著明な肥満（BMI>40の成人、またはBMIが2.33SDを超える小児）
- 介護施設や慢性期病棟の入所者

（表１）米国ＣＤＣの推奨（MMWR Recomm Rep 2013;62:1.）を基に忽那賢志医師作成



（図3）規定の変更のイメージ（新型コロナワクチンと他のワクチンとの間隔）

小田原市・箱根町・真鶴町・湯河原町の方対象

小田原医師会地域医療連携室では医師による電話相談を行っています。無料です。

☎0465-47-0833

10月

日	月	火	水	木	金	土
						1
2	3 13:00〜14:00 内科 循環器科	4 13:00〜14:00 整形外科	5	6	7 13:00〜14:00 小児科	8
9	10	11	12 13:30〜14:30 内科	13	14 13:30〜14:30 耳鼻科	15 13:30〜14:30 内科 神経内科
16	17 13:30〜14:30 腎不全 循環器科	18 13:00〜14:00 内科	19 13:30〜14:30 内科 神経内科	20	21	22 14:30〜15:30 産婦人科
23	24	25 13:00〜14:00 内科	26	27	28 13:15〜14:15 皮膚科	29
30	31					

11月

日	月	火	水	木	金	土
		1	2	3	4 13:00〜14:00 小児科	5
6	7 13:30〜14:30 内科	8 13:00〜14:00 整形外科	9 14:30〜15:30 小児科	10	11	12
13	14 13:30〜14:30 腎不全 循環器科	15	16 13:30〜14:30 内科	17 13:30〜14:30 耳鼻科	18	19 13:30〜14:30 内科 神経内科
20	21	22 13:00〜14:00 内科	23	24	25 13:15〜14:15 皮膚科	26 14:30〜15:30 産婦人科
27	28	29 13:30〜14:30 内科	30 13:30〜14:30 内科 神経内科			

小田原医師会より住民の方々へ

地域医療連携室の活動

小田原市・箱根町・真鶴町・湯河原町の病院・診療所について、左のようなお問い合わせにお答えしています。このような時には小田原医師会地域医療連携室までお電話ください。

〈上記の問合せ先〉

小田原医師会地域医療連携室　☎0465-47-0833

月曜〜土曜（日曜、祝・休日、12/29〜1/3休み）

午前９時〜正午／午後１時〜午後５時

医療機関検索は小田原医師会のサイトから利用できます

https://www.odawara.kanagawa.med.or.jp/